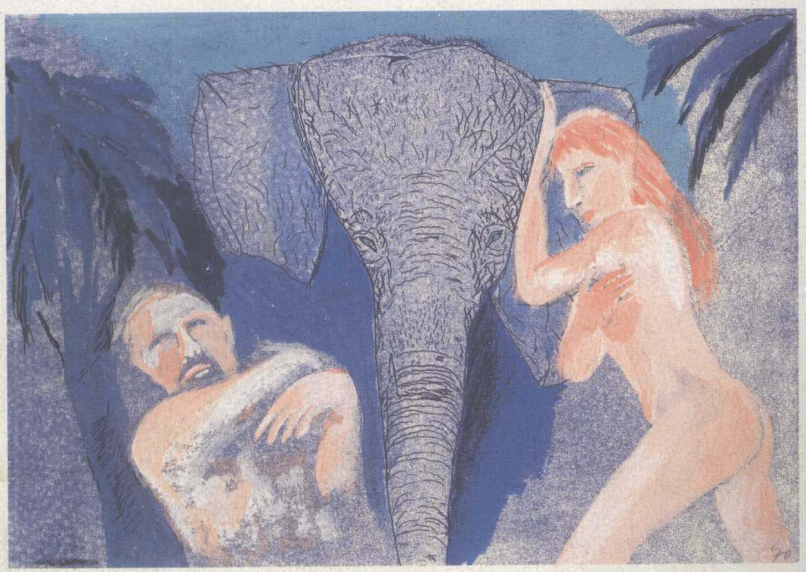
〔光る話〕の花束3　'Bright Tales' Antholog

せつない話

山田詠美 編



光文社

せつない話

山田詠美 編

光文社

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二—十二—十三
(郵便番号112—11)
光文社　出版局

せつない話　『光る話』の花束3

一九八九年七月三一日　初版第一刷発行
一九九〇年三月一〇日　第八刷発行

編　者　山田詠美
発行者　大坪昌夫
発行所　株式会社光文社
東京都文京区音羽二—一二—一三
電話　東京(〇三)九四二—二二四一(代)
振替　東京六—一一五三四七
印刷所　大日本印刷
製本所　大日本印刷
定価一、三〇〇円
(本体一、二六二円)

落丁本・乱丁本は本社でお取り替えいたします。　© Eimi Yamada 1989
ISBN4-334-93203-7 Printed in Japan

せつない話——目次

手品師　吉行淳之介　7
けものの匂い　瀬戸内晴美　28
恋の棺（ひつぎ）　田辺聖子　50
一枚の繪　八木義徳　74
贈り物　丸谷才一　99
庭の砂場　山口瞳　114
ハワイアン・ラプソディ　村上龍　137
黒い絹　山田詠美　165

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

菊の香り　D・H・ロレンス　河野一郎 訳　182
不貞　A・カミュ　窪田啓作 訳　217
ジゴロ　F・サガン　朝吹登水子 訳　241
マドモアゼル・クロード　H・ミラー　吉行淳之介 訳　253
欲望と黒人マッサージ師　T・ウィリアムズ　志村正雄 訳　267
サニーのブルース　J・ボールドウィン　北山克彦 訳　279
五粒の涙　山田詠美　337
筆者紹介・収録作品出典一覧

せつない話

山田詠美編

装丁　スタジオギブ
装画　山本容子

手品師

吉行淳之介

馴染のない街を、倉田はゆっくりと歩いていた。咽喉が乾いたので、ビールを飲みたいとおもいながら歩いていた。道の両側にときおり見かける酒場は、扉をかたく閉ざしている。考えてみれば、大部分の酒場は道に面した小さい入口をもっていて、その入口には扉がある。それは当り前のことで、拒否されている気持になる必要はない。

しかし、見知らぬ店のその扉を気軽に押す気持にはなれない。得体の知れぬ気持がする。悪質の酒場もあると聞いている地域なのだ。

そのとき、眼の前のそういう扉の一つが開いた。板割り草履をはいた若い男が扉から出て、そのうしろに若い女の白い顔があった。化粧もほとんどしていない清潔な皮膚で、まだ少女の骨格である。

「じゃ、またくるからな」

男はそう言って、少女のほうにいったん向き直り、威勢よく手をあげると、くるりと背を見せて歩き出した。少女は、その店の女である。その顔に浮んだ笑いは、あきらかに商売上のものと

みえたが、男が歩き出しても笑いはそのまま消えずに残った。男への好意のためでなく、即座に笑いを消してしまうことに馴れていない感じである。

その感じが、倉田に好もしくおもわれると同時に、安心もさせた。こういう女のいる店なら、悪質な酒場ではあるまい、と考えたのである。

少女は、笑顔のまま、扉を背にして立っている。そのままの顔で店の中に戻ることを躊らっているようだ。その少女の前に、倉田は立った。

「きみ、この店の人だね」

「はい」

「入っていいね」

少女は生まじめな表情になると、扉の前の軀を寄せて彼を通す素振りをした。

「先に入ってくれよ」

ぞんざいな言葉に、親しみを籠めて、彼は言った。

スタンドの背の高い椅子に坐って、ビールを飲んでいる彼の耳の傍で、男の声がした。

「倉田さん……。倉田龍夫さんですね」

首をまわすと、そこに挑むように眼を光らせた少年の顔があった。小柄で子供染みた顔つきなので咄嗟に少年とみたが、酒場で酒を飲んでいるのだから、青年なのだろう。倉田は小説家である。時折、顔写真が新聞や雑誌に出ることはあるが、ひろく知られた顔ではない。したがって、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

声をかけてきた見知らぬ男は、文学好きの青年とおもえた。その男の挑む眼は、悪意ではなく、声をかけてきた興奮のためだろうとはおもったが、倉田は鬱陶しい気分になった。酒を飲んでいるとき、小説の話になるのは、好まなかった。

「この店には、よくお見えになるのですか」

「いや、今夜がはじめてです。通りがかりになんとなく寄ってみた……」

「気分転換ですか」

「ま、そうです」

車に乗って二十分ほどの町に在る小さいホテルの部屋に籠って、倉田は仕事をつづけていた。厄介な、疲れる仕事なので、部屋を抜け出して、川を見に出かけた。橋の上に立って、川を眺めた。下町に流れている黒い川で、悪臭が漂っていた。しかし、澱んだ川面に映る街の灯火は美しく、やがて馴染んだ鼻腔は臭いを感じなくなり、夜の風が快かった。

「ぼくは、川井と言います」

青年は名告り、つづいて倉田のいるホテルのある町の名を口にすると、

「いまは、ホテルでお仕事ですか」

「そうですが、どうして」

「ゴシップ記事に、そんなことが出ていました」

一層、倉田は鬱陶しくなった。噂ばなしの類だけ読んでいて、実際の作品は一つも読まずに、その作家のイメージをつくり上げている青年が目立って増えている。彼は黙って、ビールを飲み

干した。頃合を見計らって、店を出ようとおもったのだ。そのとき、川井と名告る青年が、言葉をつづけた。

「お作は、以前から愛読しています。いろいろの人の作品を読んでみましたが、倉田さんのがふしぎとぼくの体質に合います。こまかいところまで、とてもよく分ってしまうのです」

その例として、川井は倉田の作品の名をあげ、その一節について語った。愛読しているという川井の言葉に嘘がないことは分ったが、その気負った言い方が倉田を煩わしい気持にした。

「読んでいるのですか。君は奇特な人ですね」

と、立上る気配をみせたとき、素早く川井が言った。

「今度、ホテルの方に伺ってよろしいですか」

言葉遣いや態度は折目正しい。しかし、煩わしい。

「いや、君。ぼくはそこで仕事をしているわけなんだから……」

「いや、お仕事の邪魔はしません。頭の疲れたときに、気分転換のために……」

「しかし、仕事のときに、小説の話をしては、ますます頭が疲れるばかりだ」

と、倉田は不機嫌に言った。

「小説の話をしに伺うわけじゃないのです。手品を見ていただきたいとおもって」

「手品……」

「種明しもいたします」

倉田は、相手の顔を眺めた。手品そのものに好奇心を起したわけではなく、そういう男に興味

を抱いたのだ。川井は同意を求めるように、スタンドの向う側に立っている少女に顔を向けた。
「ええ、川井さんの手品、素人ばなれしていますわ」
眼を川井に向けたまま、倉田に言った。生まじめな表情で、一瞬、眼だけ笑った。倉田は、少女と川井とを見比べて、
「君は、この店によく来るのかな」
「ときどき」
と、少女が替りに答え、やや間を置いて川井が、
「毎日でも、来たいのですが」
「君は、学生ですか」
学生とすれば、高校生の服装が似合う。やはり、少年の面影が抜けていない。
「いえ、勤めています。家具をつくる会社です」
「そう……」
倉田は、何とはなしに、店の中を見まわした。安直なスタンドバーで、一回の勘定は大した額にはなるまい。しかし、それは川井にとっては負担になる金額なのだろう……、というようなことを頭の隅に浮べながら、見まわしたのだ。店の中は、一応北欧風のつくりを真似ているが、洋酒棚の隅に赤いダルマが載っていた。その片眼に、墨で黒目が入れてある。倉田は、少女に訊ねた。
「きみのダルマか」

「マダムのです」
倉田は、白い片眼と墨の入った眼とを見比べながら、
「どんな願いごとなのだろう」
「さあ……」
少女が頬笑み、川井は苛立って会話に割り込んできた。
「先生……」
すぐに言い直して、
「倉田さん、伺ってよろしいですか」
「いいですよ」
「いつにしましょう」
「あさって、……そうだな、会社が終ってからでも、いらっしゃい」

その日、ホテルのロビイの隅の椅子に、倉田は川井と向い合って坐っていた。二人の間に、小さいテーブルがある。倉田は、ただちに話題を狭く絞った。
「手品は、どのくらいやっているのですか」
「十年くらいになります。一緒にやってきた友だちで、プロの手品師になったのもいます」
「十年か、それではかなりのものだな。さ、見せてもらうか」
と、倉田は椅子の背に深くもたれて、川井を促した。ロビイには多くの人影があって、それぞ

れ静かに会話を取交している。その一角でこれから手品がはじまるという状況が、倉田に悪戯っぽい面白味を与えた。

慎重な指先で川井が風呂敷包を解くと、古びた長方形のボール箱があらわれた。トランジスタ・ラジオのセットが入っていた箱ということが、外側の文字で分る。蓋を開くと、手垢によごれたトランプや、赤い色の小さな球や、水色の薄い絹のハンカチなどが、整然と収めてあるのがみえた。

川井は箱の底から、大切そうに黒い布を取出して、一層慎重な手つきでテーブルの上に開いた。黒いビロードの布で、金モールの縁取りがある。舞台の手品師が、小さな卓にかぶせて、その上に道具を置くための布である。しかし、その布は本ものよりはるかに小さいために、テーブルを覆い切れない。周囲をひろく余して、テーブルに貼り付いた。金モールは赤錆色に変色しており、布はビロードが擦り切れ、あちこち白っぽくささくれ立っている。川井は、掌で慈しむように、丁寧に布を押えた。

倉田は、微笑した。ロビイの人たちの訝しげな眼に、どんな光が宿るようになっても、たじろぐまいと身構えた。川井を庇護する気持で、その指の動きを熱心に見守った。

川井の演じてみせた手品は、ありふれたものだったが、習熟した達者な技巧である。掌の裏おもてを示す。何も無い。その掌を川井がひらひらさせると、指の股に赤い玉が一つ挟まって現れ出る。赤い玉はしだいに数が増え、やがて、すべての指と指とのあいだに並ぶ。

倉田はそのささやかな手品を眺めながら、一人の詩人についての挿話を思い浮べていた。その

秀れた詩人は、厄介な人間関係に巻き込まれたあげく、妻に去られ、孤独な晩年を送った。幼い娘が一人いた。ある夜、娘が二階の書斎を覗いてみると、机の前に坐った詩人がしきりに指を動かして、赤い指の玉の練習をしていた、という。

倉田はその挿話を聞いたとき、詩人の孤独感が身に沁み込み伝わってくるのを覚えた。だが、いま眼の前にいる少年の面影を濃く残した男の顔は、得意気な表情で愉しそうに輝いていた。

しかし、間もなく、倉田は一つの発見をした。

黒いビロードの布の上に、トランプを並べはじめた川井の指先が眼に映った。その五本の指の爪は、すべて、深く切り取られていた。いや、鋏で切ったものではなく、齧り取られたようなギザギザの縁であった。あまりに深く齧り取られているために、五本の指の先端は爪では終らず、まるい肉の盛り上りになっていた。

「おや、君、その指はどうしたの」

おもわず倉田は声を出した。動揺の気配が伝わってきた。

「手品をするために、深爪する必要があるのかな」

むしろ執成すように、倉田は言ったが、川井は一瞬、握り拳の中に指先を隠す動作を起しかけ、

「いえ、そういうわけじゃないんです」

と、恥じらうように言った。

倉田は、川井の愉しげな表情の奥に、陰気な孤独なもう一つの顔をみた。一人だけの場所で、爪を噛み、しだいに苛立って爪を齧り取り、坂道を転がり落ちてゆくようにその動作が止らなく

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook